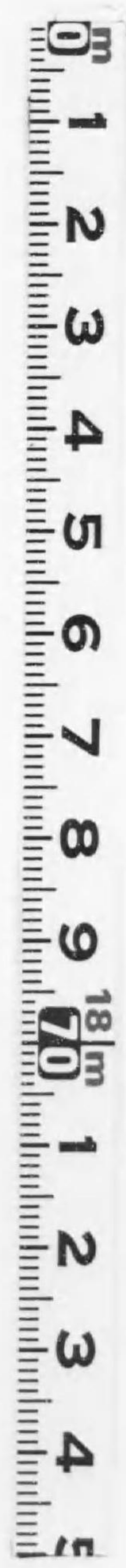


特116

677

釋迦如來御和讚



始





#118

677





我昔所造諸惡業  
從身口意之所生

皆由無始貪瞋癡  
一切我今皆懺悔

三寶歸依

弟子某甲盡未來際南無歸依佛南無歸依法南無歸  
依僧南無大恩教主釋迦牟尼佛生生世世值遇頂戴

釋迦如來御和讚

憶へ我等が世のなかに  
本は何時とも判らねど  
涯際も無き事譬ふれば  
死ぬも生るも皆ともに

死つ生れつすることの  
死つ生れつ涯際も無し  
輪轉る轆轤の如くにて  
可憐哉輪廻の浮き沈み



浮うきつ沈しづみつする衆も生のと

助たすけ濟すくはむためにとて

誓ちかひ願ひふかきは餘よ佛ぶつより

罪つみ障みの涯はてし際しを無なき故ゆゑに

難なやみ給たまひし釋しや迦か牟む尼には

最いども名な高たかき大だい王わうの

慈じ悲ひの法あな王たは其その往むか昔し

深ふかき誓ちかひ願ひと立たてたまふ

見み棄すてられたる我われ我くの

長なが載が永あひ劫ひだの御おん艱なや難み

今いまは往むか年しを迦か毘び羅ら衛ゑの

宮みや殿やに降がう誕たんしたまへり

時とき節きは陽やう春しゆん融のど和かなる

花はな見み盛さかりの無む憂う樹じゆ下げに

花はなと一ひと枝えだ手た折をらむと

何なんの惱なやみもくるしみも

時ときに不ふ思し議ぎや樹きの下もとに

蓮はな華なの臺うてな上なに誕み生ほ佛とけは

卯う月づき八やう日かのあさほらけ

遊あそび給たまひし摩ま耶やの皇き后み

右ゆん手で舉あげさせ給たまひしに

無なくて安あん産ざんしたまひぬ

さよさ青はち蓮すの華はなひらく

笑えみとふくませ給たまひける



やがて一二頭の龍王は  
 淨き湯水と打ちそそぎ  
 時に氣瑞は天地に  
 天の音樂にぎくくと  
 誕生れ給ひし獨尊佛は  
 四方に玉歩と移させば

奇しきことにぞ青空に  
 御身體残らず淨めけり  
 充滿て彌綸何處と無く  
 響きわたりて妙なりき  
 人手不擁に起ちたまひ  
 光明遍照くかがやきぬ

却説も爾の時誕生佛は  
 唱へたまひし御宣言  
 獨り尊貴最勝誕生佛は  
 光明かがやく淨國へ  
 爾時に父大王母皇后は  
 厥の他群郷百僚も

最もたふとき妙音にて  
 地にも天にも唯我獨尊  
 闇昏に迷へる我我を  
 迎へ給はむ師子吼なり  
 云何に歡喜たまひしぞ  
 俱によろこび祝賀けり



斯くて父大王母皇后は  
 聰明き人相師招かれて  
 相師おどろき白すには  
 王となりては世と治め  
 太子の人相缺け目なく  
 廣き五天に誰れひとり

眞實喜悅の餘りにぞ  
 太子と觀相させたまふ  
 太子は世間の眼目なり  
 僧となりては人を度す  
 智徳無雙に在しまして  
 肩と比ぶるものを無し

然れど太子は世の中の  
 國家も皇妃も振棄てて  
 苦樂多年の功勳を  
 初の八日のあけほのに  
 然れど法王は甚大久遠  
 今は往昔の大願に

塵と厭はせ雪山に入り  
 道の犠牲と成りたまふ  
 積ませ給ひて臘月なる  
 正覺成就せ給ひけり  
 業已に佛と成りましぬ  
 酬いませしませ示現なり



正覺山やまと下くだらせ王宮わうきうに

對面あはせたまひて懇切ねんごろに

尋ついで五比丘ごびくと親族しんぞくと

殘のこる隈くまなくもろとも

然しかも法王あなたの說法せつぽふは

秘密ひみつ頓漸とんぜんいろくくと

還かへりたまひて父大王ちいぎみに

説といて得道とくだうせしめらる

異端いたん邪教じやけうにいたるまで

説といて得道とくだうせしめらる

長年ながの月日つきひを厭いとはずに

説といて得道とくだうせしめらる

殊ことに法王あなたは亡なき佛母はふの

昇ゆいて正法みのりと慇懃ねんごろに

實げにも法王あなたの御出現おでましと

闇夜やみの大明燈ともしび渡わたし船ぶね

若もしも法王あなたの御出現おでましが

何時いづつの世よまでも我われ我くは

爲ために一夏天ひとなつてんじやう上やうへ

説といて得道とくだうせしめらる

物ものに譬たとへていふならば

または優曇華うごんげふんた芬陀利華ふんた

減劫いままの惡世あくせに無なりせば

闇夜やみの闇路やみちに辿たどらなむ



斯かくて法あな王たは縁えん盡つまで

印度いん拘く尸し那なの樹きの間あひに

期こ節ろは二に月ぐわつの十じふ五ご日にち

八はち部ぶ天てん龍りう比ひ丘く比ひ丘く尼に

其その他た三さん界がい六ろく道だうの

泣なきつ叫さけびつ皆みなとも

二に千せん餘よ年ねんの其そのむかし

無む餘よの涅ね槃はんにい入り給たまふ

霽はれし明つ月き夜よの三ま更よなかに

優う婆ば夷わ優う婆ば塞そく圍とり繞まさぬ

有ありと所あ有ら衆ゆる生もの

集つひ來きたりて取とり卷まきぬ

時ときに法あな王たは尊そん顔がんに

後のちの世よまでも哀あは愍れみて

法の要りの遺ゆ言あ訖ごん訖やみしとき

寢ね入いる如ごとくに成ならせられ

時ときに御お弟で子しの阿あ難なん尊そん

暫し時ばし悶も絶たて地ちに倒たふれ

慈じ悲ひの涙なみだともよほさせ

法の要りの遺ゆ言あ垂ごんれたまふ

四あ邊たり寂しづ寞かに聲お絶とえて

永ながき別わかれとなりにけり

あまあり愁しう歎たんしたまひて

宛さ然し死にん人にんの状さまなりき



されどひとたび人間の

云何に佛の身なりとて

然かし法王の法身は

さららに億億萬劫に

常に閻浮と去らずして

幽界と顯界と厭はずに

或は彌陀とも薬師とも

身とば千萬億數に

或は魔王に權現に

或は國王大臣と

或は子と成り親と成り

成りて苦海の我我と

形體受けたる者はみな

死て往くのは世の習ひ

滅後幾世の如今にまで

滅びたまはぬ壽量なり

我等有情とあはれませ

常住も説法したまひぬ

不動大日大菩薩

分けて説法したまひぬ

或は鬼神に明神に

成りて説法したまひぬ

或は親友兄弟と

濟ひまします本誓なり



却説も苦海の我我は

有爲の浪路に船もなく

然れど一び釋迦牟尼の

法王一人の救護ごと

佛子たる身は釋尊の

脇目觸らずに一筋に

それと知らずに浮浮と

西や東に漂流へり

慈悲の法船に濟はれて

思ひ取る身は佛子なり

袖に縋りて飽くまでも

あつく信仰すべきなり

あつく信仰するものは

御恩忘れず怠らず

名號を稱へて拜む身は

癡闇の心はあきらかに

名號を稱へて拜む身は

菩薩大戒のこりなく

寢ても覺ても釋尊の

名號を稱へて伏し拜め

慈悲の光明に照されて

無始の罪障消滅るなり

五戒八戒十善と

持つともなく持つなり



名號みななを稱とへて拜をむ身みは

怨敵あだや災難わざはひみななのぞき

名號みななを稱とへて拜をむ身みは

憂悲うれひ苦惱くるしみ疑惑うたがひの

名號みななを稱とへて拜をむ身みは

心意こゝろ柔輒やはらぎ腹立はらたたす

惡魔あくま外道げだうも稽留よりつかず

日日ひひに福德ふくとくきたるなり

心意こゝろ寂靜しづかに攝をさまりて

雲くもや霞かすみは消きえ失うせむ

常つねにうれしく勇いさましく

人ひととまじはり愛あいせらる

名號みななを稱とへて拜をむ身みは

人ひとを尊うやま敬まひ哀愍あはれみて

名號みななを稱とへて拜をむ身みは

世人ひとに信義まことを盡つくしてぞ

つねに信仰しんかうあるひとは

つねに禮拜らいはいをこたらず

心意こゝろ寬宏ゆたかに安樂あんらくに

無心むしん氣樂きらくにくらすなり

兩親おやに孝行かうぎ君主きみに忠ちゆう

二利にりの願行ぐわんぎやう成就じゆうるなり

つねに讀經どくきやうをこたらず

つねに供養くやうを營いめよ



然れど信仰なき衆生は  
 名號を稱ふる事もなく  
 況して無縁の儕輩は  
 偶まに信仰あるひとの  
 然かし我等は幸運ぞ  
 此世他世のするまで

瘖瘂や耳聾に恰も似り  
 道と聽く氣も無き者ぞ  
 誹謗り輕侮り嘲笑りて  
 身まで妨害するものぞ  
 大悲世尊の慈悲力に  
 助け救はるうれしさよ

大悲世尊の慈悲力は  
 二世も三世も貫きさて  
 おもへ我等が信仰の  
 本願力頼みて豁然と  
 心地開發するまでは  
 救護ひ給へと祈るなり

親の慈悲にも彌まさり  
 闇昏の心と照らしませ  
 歸する處は釋迦牟尼の  
 心地開發することぞ  
 頼む法王に打ちもたれ  
 南無や本師の釋迦如來



今<sup>こん</sup>此<sup>し</sup>三<sup>さん</sup>界<sup>がい</sup> 其<sup>ごう</sup>中<sup>ちゆう</sup>衆<sup>しゆう</sup>生<sup>じやう</sup> 而<sup>に</sup>一<sup>いち</sup>處<sup>しよ</sup>人<sup>にん</sup> 唯<sup>ゆゑ</sup>我<sup>が</sup>今<sup>こん</sup>此<sup>し</sup>衆<sup>しゆう</sup> 一<sup>いち</sup>人<sup>にん</sup> 能<sup>のう</sup>多<sup>た</sup>悉<sup>しつ</sup>皆<sup>かい</sup> 爲<sup>ゐ</sup>諸<sup>しよ</sup>是<sup>せ</sup>是<sup>せ</sup> 救<sup>ぐ</sup>患<sup>げん</sup>吾<sup>ご</sup>我<sup>が</sup> 護<sup>ご</sup>難<sup>なん</sup>子<sup>し</sup>有<sup>う</sup>

返 三

なうまなくさむまむたーほたなむばく

七 返

南<sup>な</sup>無<sup>む</sup>釋<sup>しや</sup>迦<sup>か</sup>牟<sup>む</sup>尼<sup>に</sup>佛<sup>ぶつ</sup> 南<sup>な</sup>無<sup>む</sup>釋<sup>しや</sup>迦<sup>か</sup>牟<sup>む</sup>尼<sup>に</sup>佛<sup>ぶつ</sup>

七 返

釋迦如來御和讚選述の趣意并に詠讚法

抑も此娑婆世界は主師親の三徳を具足したまへる法王釋尊の教化したまふ所の領分にして我等は悉く所化の衆生なるにも拘らず從來未だ嘗て釋尊を唱禮詠讚し廣大無邊の恩徳に報い奉つる所の御和讚として最も適當なるも篇漸く成るを告るに至れり余元來斯學に闇しと雖も平易通俗を旨とし普く善男善女をして常に詠讚せしむるに便なるを目的とせし也冀くは先輩後賢厥の不文なるを恕せられむことを

○先づ釋尊の名號又は木佛金佛畫像等の寶前に香華燈燭等の供具を辨備し焼香三拜し次に着坐して靜に懺悔の文を唱へ次に三寶を稱念し了つて第一段の第一句を擧すべし二人以上數百人の時は第二句より同音に詠讚する事

○此れを詠讚する時には成る可く鉦結を用ひ度し本篇は四句一聯と作したるに依り一句毎に鉦結を五打し四句にて二十打し一を増すことを得ず一を減することを得ざるなり

○鉦結を用ひて詠讚するには長短其中を得て句頭の一字と句尾の一字とを長く引き最初の三字にて一打し次の四字にて一打し次の五字にて三打すべし而して二句と第四句とを中音にし第三句目を上音にすることを要す

著者 比丘法王子敬誌



大正四年三月二十四日印刷  
大正四年三月二十七日發行

定價六錢

著者 高田道見  
發行所 東京市芝區愛宕町一丁目十六番地  
永田顯了

發行所  
發賣所

東京市芝區愛宕町一丁目十六番地

法王閣  
佛教館

著者 高田道見  
東京市芝區愛宕町一丁目十六番地  
發行所 永田顯了



終

